

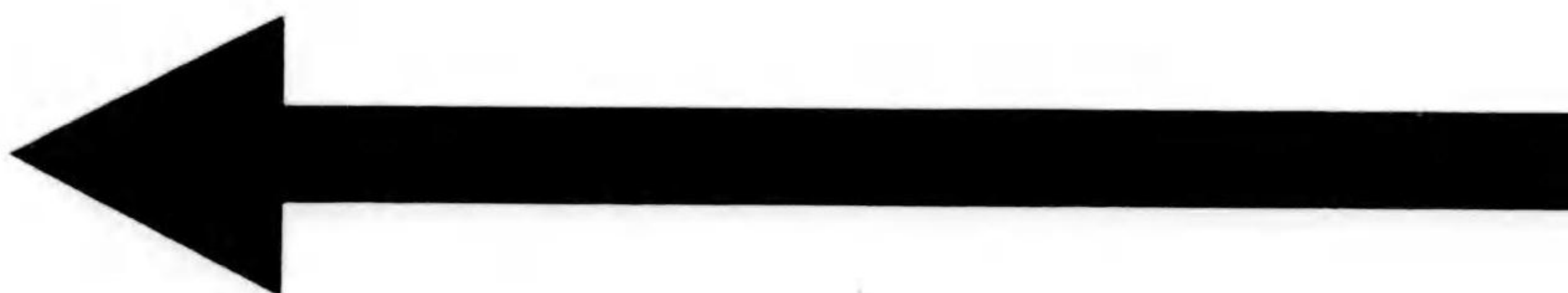
百人一首のたの取方



特



始





持100  
317

はしがき

世人の多くは、歌留多の遊戯を以て、婦女子の技に  
 過ぎないとして居るが、斯の如き言は、その眞髓を  
 せざる亞流たる事を、自ら告明するものである。眞  
 に至つては、典雅にして優麗なる裡に、電光閃火の  
 微なる權謀術數を廻らす。されば膽略あつて、然かも  
 水も漏さざる周到綿密の用意ある士に非ずんば、到底  
 その快趣を盡し難い。

著者は、多年此の競技に親しんで、戦場を馳驅する

大正  
 6. 10. 22  
 内交



き が し は

事十數年に及んで今日に至つた。今夏來TK書院主人の清燭をうけつゝ、徒らに繁忙なる爲め、その意を果さなかつたが業務の傍ら筆を執つて、多年の研究を此處に披瀝するを得た。渺たる一小冊子が、讀者を聊か裨益する事を得れば、著者は望外の幸である。敢て同好の士に進むると云爾。

大正六年初秋、谷町の寓居に於て

白久良生

百人歌留多の取り方

目次

第一章 歌留多に就て

一、歌留多の變遷……………一

二、百人一首……………三

三、難解なる歌……………九

四、競技方法……………二六

五、東京歌留多會規定……………二七

第二章 歌の暗誦とキマリ字



次 目

第三章 札の配列法

- 一、歌の暗誦方法……………三
- 二、キマリ字……………五
- 一、下の句に依る配列法……………六
- 二、上の句に依る配列法……………六
- 三、キマリ字に依る配列法……………七
- 四、上の句の二字目に依る配列法……………七
- 五、其の他の配列法……………七
- 五、最も宜き配列法……………七

第四章 札の取り方

- 一、札の取り方の種類……………八
- 二、敵の札の取り方……………八
- 三、自己の札の取り方……………八
- 四、山札の取り方……………七

第五章 送り札

- 一、送り札の種類……………九
- 二、自己の送り札……………九
- 三、敵の送り札……………九

第六章 覗ひ方及び姿勢

- 一、眼の覗ひ方……………九

次 目



二、姿勢……………九六

第七章 競技上の一般心得

一、配列せる札の記憶……………九九

二、出札の記憶……………一〇一

三、御手附……………一〇二

四、読み方……………一〇三

目次終



# 百人一首歌留多の取方

## 第一 歌留多に就て

### 一、歌留多の變遷

百人一首の歌は重に、古今集、新古今集、拾遺和歌集、後拾遺和歌集、千載集等から集めたもので、時代は審かでないが、詠人から考へて見ると足利時代に拵へたものらしい。

歌留多の遊戯は、その時代の官女等が、眩ゆき許りの銀燭の下で



いとも優雅に行はれたものであらう。ずつと降つて徳川時代になる  
と、歌留多遊びの事は良々の本に見えてゐるが到底今日の如き競技  
では無かつた。「源平」とか「散らし」或は「天地人」に列べて、「天」の  
札が出れば次の人に三枚送り、「人」の札が出れば一枚送るとかした  
ものである。今日の競技に較べる時は、甚だしく幼稚であつて、然  
も興味の尠い、恰も雙六の如きものである。従つて血氣の若者の遊  
技では無く、女、子供の新春の遊びに過ぎなかつた。

明治三十五六年頃になつて、東京、大阪、神戸、横濱等に始めて  
歌留多會が出来た。而して各自が技を練つて盛んに對抗競技を行ふ  
様になり、次いで東京歌留多會なるものが組織されて、引いて今日

の隆運を來したのである。

當時東京に於ける歌留多會では、若葉、村雨、吉野、明静、伊泉、  
等が重なるものである。その中多きは五十人六十人、少きも二  
十人を擁して、盛んに研究し、練習を勵んだ。明治三十七年以來、  
東京歌留多會では、毎年天長節及び紀元節の二回に全國の爭覇戦を  
行つて居る。斯くして此等の撰手と、素人とは格段の相違を生ずる  
に至つた。素人で幾ら上手だといつても、到底撰手に及ばない。然  
しその差は僅かに一步の差である。素人も練習の方法如何に依つ  
ては、撰手以上の腕前となる事が出来る。

百人一首



秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我が衣手は露にぬれ  
つゝ、  
天智天皇

春過ぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかくやま  
持統天皇

あし曳の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも  
柿本人麿

寝ん  
田子の浦にうち出で見れば白妙の富士の高嶺に雪は降

りつゝ、  
山邊赤人

奥山にもみぢふみ分け鳴く鹿の聲きくときぞ秋はかな  
しき  
猿丸太夫

かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更け  
にける  
中納言家持

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

我が庵は都のたつみ鹿ぞすむ世をうち山と人はいふなり  
阿部仲麿

花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめ  
喜撰法師

せしまに  
小野小町

これやこの行くも歸るもわかれては知るも知らぬも逢  
坂の關  
蟬丸

和田の原八十島かけて漕ぎ出ぬと人には告げよあまの  
釣船  
参議  
篁

天津風雲の通ひ路ふきとちよ乙女のすがたしはしとど  
めん  
僧正照遍

つくばねの嶺よりおつるみな川の戀ぞ積りてふちとな  
りぬる  
陽成院



みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆるるにみだれそめにし我ならなくに

河原左大臣

君が爲め春の野に出て若菜つむ我衣手にゆきはふりつゝ

光孝天皇

立ちわかれいなばの山の嶺に生ふる松としきかば今歸りこん

中納言行平

千早振る神代もきかす龍田川かられくれないに水くぐるとは

在原業平朝臣

すみの江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人目よぐらむ

藤原敏行朝臣

難波がた短かきあしのふしの間もあらで此の世を過してよとや

伊勢

わびぬれば今はたおなじ難波なる身をつくしてもあは

んぞぞ思ふ

元良親王

今こむと云ひしばかりに長月の有明の月を待ち出づる

素性法師

吹くからに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしと

文屋康秀

いふらむ

月見れば千々にもものこそかなしけれ我が身ひとつの秋

大江千里

にはあらねど

菅家

此の度はぬさもとりあへず手向山紅葉のにしき神のま

名にしおは逢坂山のさねかづら人にしられて来るよ

三條右大臣

見かの原わきて流るる泉川いづみきとてか戀しかるらむ

中納言兼輔



小倉山みねの紅葉ば心あらば今ひと度の御幸またなむ

貞信公

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

源宗幸朝臣

こゝろあてにをらばや居らむ初霜のおきまどはせるしら菊の花

八河内躬恒

朝ぼらけ有明の月と見るまでによし野の里にふれる白雪

坂上是則

有明のつれなく見えしわかれよりあかつきばかりうきものはなし

壬生忠峰

やま川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

春道列樹

久かたのひかきつどけき春の日にしづ心なく花のちる

らむ

紀友則

夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月宿る

藤原深養

父しら露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ

文屋朝康

ちりける

あさち生の小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の戀しき

参議等

わすらるる身をば思はずちかひてし人の命の惜しくも

右近

あるかな

忍ぶれど出でけり我が戀はものや思ふと人のとふまで

平兼盛

戀すてふ我が名はまだきたちにけり人知れずこそ思ひ

壬生忠見

そめしが



あひ見ての後の心にくらぶればむかしは物を思はざり  
けり

權中納言敦忠

契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波こさじと云

清原元輜

あふ事の絶えてしなくばなかくに人をも身をも恨み  
ざらまし

中納言朝忠

あはれともいふべき人はおもほへど身の徒になりぬべ  
き哉

謙徳公

御垣守衛士のたく火の夜はもえてひるは消えつつ物こ  
そ思へ

大中臣能宣朝臣

ゆらのを渡る舟人かちをたえ行衛も知らぬ戀の道かな

曾根好忠

君が爲め惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひける

かな

藤原義孝

八重むぐら茂れる宿の淋しさに人こそ見えね秋は來にけり

惠慶法師

なげきつつ獨りねる夜の明くるまはいかに久しき物と  
かは知る

右大將道綱

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけて物を思ふ頃  
かな

源重之

わすれじの行末までは難ければ今日を限りの命ともがな

儀同三之母

かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじなもゆ  
る思ひを

藤原實方朝臣

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし  
夜半の月哉

紫式部



明けぬればくるる物とは知りながら猶恨めしき朝ぼらけかな

藤原道信朝臣

ありま山いななさ原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

大貳三位

瀧の音は絶えて久しく成りぬれど名こそ流れて猶聞えけれ

大納言公任

いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな

伊勢大輔

あらざらむ此の世の外の思ひ出に今一度の逢ふ事もがな

和泉式部

夜をこめて鳥のそらねは計るとも世に逢坂の關はゆる

清少納言

さじやすらはで寝なまし物を小夜更けてかたむく迄の月を

見し哉

赤染衛門

今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふ由

左京太夫道雅

もがな大江生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

小式部内侍

あさぼらけ宇治の川霧たえくにあらはれ渡る瀬々の

権中納言定頼

網代木恨みわびほさぬ袖だにあるものを戀に朽ちなむ名こそ

相模

惜しけれ春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜

周防内侍

しけれもろ共にあはれを思へ山櫻花より外に知る人もなし

前大僧正行尊



心にもあらで浮世にながらへば戀しかるべき夜半の月  
かな

三條院

あらし吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり

能因法師

夕ざれば門田のいなば訪れてあしのまる屋に秋風ぞ吹く

大納言經信

淋しさに宿を立ち出でて眺むれば何處もおなじ秋の夕暮

良選法師

音に聞きたかしが濱の仇波はかけしや袖の濡れもこそ

祐子内親王家紀伊

高砂の尾上の櫻咲きにけり外山のかすみたたずもあら

前中納言匡房

契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬ

めり

藤原基俊

うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとはいらぬ

源俊頼朝臣

和田の原こぎ出でて見れば久方の雲井にまがふ沖つ白浪

法性寺入道前關白大政大臣

瀬をはやみ岩にせかるる瀧川のわれても末に逢はんと

崇徳院

ぞ思ふ

左京太夫顯輔

淡路島通ふ千鳥のなく聲に幾夜寝ざめぬ須磨の關守

源兼昌

長からむ心もしらす黒髪のみだれて今朝は物をこそ思へ

侍賢門院堀川



時鳥なきつる方を眺むればただ有明の月ぞのこれる

後徳大寺左大臣

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞなくなる

皇太后宮太夫俊成

思ひわびさても命はあるものをうきに絶えぬは涙なり

道因法師

けりながらへば又此の頃やしのばれんうしと見し世ぞ今は

戀しき藤原清輔朝臣

夜もすがら物思ふ頃は明けやらで閨のひまさへつれな

俊恵法師

かりけり村雨の露もまだひぬまきの葉に霧たちのぼる秋の夕暮

寂蓮法師

嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なる我が涙かな

西行法師

難波江のあしの假寝の一夜ゆへ身をつくしてや戀わたる

べき皇嘉門院別當

玉の緒よ絶えばなたえねながらへばしのぶる事のよは

式子内親王

りもぞするきりくすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき獨りか

も寝ん後京極攝政前大政大臣

見せばやなおじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれじ色

般富門院大輔

はかはらじ我が袖は汐干に見そぬ沖の石の人こそ知らねかはく問

二修院讃岐

もなし世の中は常にもかにも渚こぐあまの小舟をつなでかな

鎌倉右大臣

しも



おほけなく浮世の民におほふかな我が立袖に墨染の袖

前大僧正慈圓

三よし野の山の秋風小夜更けて故郷さむく衣うつなり

参議雅經

花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆく者は我が身なりけり

入道前大政大臣

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くやもしほの身もこがれ

権中納言定家

人もおし人も恨めしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は

後鳥羽院

風そよぐならの小川の夕ぐれは御祓ぞ夏のしるしなり

正三位家隆

けり  
百敷や古き軒端のしのぶにも猶あまりあるむかしなり

けり

順徳院

三、難解なる歌

春過ぎて夏來にけらし白妙の……

香久山の民家に、白い夏の衣が干してあるのを、持統天皇が藤原の

宮に在しまして、遙かに御覽になり、春も既に過ぎ夏が來たのであ

るご感せられた。

天津風雲の通ひ路吹きとぢよ……

堂上公卿方の姫達が、豊明節會に舞はれる。その美しい様を見て、

天女の舞ふが如しとの意。

千早振を神代もきかず龍田川……



紅葉が龍田川の水に映じて美しい。恰も紅の中を水がくぐりぬける様である。かういふ事は遠い神代の話にも聞いた事がない。

此の度は幣も取りあへず手向山……

菅公が朱雀院に供奉して奈良に詣で、同意が無くて幣奉る事が出ないが、手向山の紅葉を心ばかりにあげるとの意。

名にしおはば逢坂山のさねかつら……

さねかつらを人に擬して、その名の如く逢はれるものならば、人に知れない様に逢はれる術はないか。

人はいざ心も知らず故郷は……

人の心は變り易いものであるが、故郷には昔のままに花が香つてゐる。

自分の心は故郷に咲く花の如く、昔と少しも異なるない。

白露に風の吹きしく秋の野は……

秋の野の千草には白露が美しく宿つてゐる。其處へ風が颯と吹くとさら／＼と緒を通さない玉の様にこぼれる。

哀れともいふべき人はおもほえて……

自分は今物思ひに絶えずに死ぬるであらうが、あはれと思つて呉れる人はない。

御垣守衛士の焚く火の夜は燃えて……

戀ひ焦るる心は、恰も御垣を守る士が焚く火の様に夜は燃えるが、晝は物思ひに惱んで魂は消え入る様である。



かくとだにえやは伊吹のさしも草……

斯様にまで思ひ居るのをしらせ度いが、打明けていふ事が出来ない。

伊吹山の艾の燃える如くに心は燃えて居るのを知らないだらう。

やすらばで寝なましものを小夜更けて……

必ず来ると契つてあるのにまだ来ない。夜は既に更けて月が山の端

に傾いた。愁じいに約束がなければ待たずに寝たものを。

よをこめて鳥の空音ははかるとも……

齊の孟嘗君は、函谷間を通らうとして、雞の鳴く音を真似て關守を

欺いたといふが、妾と君との逢ふ瀬は斯かる手段では許されまい。

世の中よ通こそなけれ思ひ入る……

憂き事辛い事を遁れやうと思ふて、山の中に隠れたが、鹿の鳴く聲を聞くと悲しくなる。此の世の中には憂い事は絶えないものである。

夜もすがら物思ふ頃は明けやらで……

物思ひに沈んで耐え難い。早く夜が明けて呉れよと願ふけれど却々

夜は明けない。閨の戸の隙間を漏れる風さへ肌寒くて切ない思ひを

増すのみである。

村雨の露もまだひぬ榎の葉に……

深山の榎の葉に村雨が一しきり降つて、その露はまた乾き切らない

のに、霧が立ち上つて夕どなつた。秋の夕暮はいとど淋しい。

見せばやな雄島の蛋の袖だにも……



雄鳥の海女の袖でさへも、よし濡れる事はあつても色は變らない。  
自分もその通り心は變らないが、之れを情ない入に見せても遣り度  
い。

風そよぐならの小川の夕暮は……

そよぐと風の吹いて居る、奈良の小川の夕暮は、涼しくて夏であ  
るのを忘れる。御祓の祭を見て、始めて夏であるわいと思はれる。

春の夜の夢ばかりなる手枕に……

二條院の徹夜物語に、周防内侍が枕が欲しいといつた時に、大納言  
忠家が、自分の肘を枕とせよといはれた。春の夜の夢の間を、その  
ために浮名を立てられる様では口惜しい。

かささぎの渡せる橋に置く霜の……

鶺鴒といふ鳥が、翼を列べてかけり行く様を橋に見立てて、橋に霜  
が白く置かれてあるのを見ると、夜の更けたのが知れる。

小倉山峰のもみち葉心あらば……

小倉山の峰に美しく飾られたる紅葉のはらくとこぼれるのを惜み  
てもみち、葉よ、心があるならば、今上のも一度御臨幸のある迄散  
らずに居れよ。

由良の戸を渡る船人楫を絶え……

由良の水門を渡る舟人が楫を失つた様に、我が身の戀は迷ひに迷ふ  
て、行末はどうなるやら危ぶまれる。



忘れじの行未迄も難ければ……

未來永劫に忘れじと契つた我が身の戀も、男の心は移り易い。それを思へば今日の様に嬉しい事は又とあるまい。行未の事を考へずに今日限りの命であつたならどんなに嬉しいだらう。

四、競技方法

競技方法は、下の句を讀んで、下の句の札を取るもの、詠人の名を讀んで、下の句の札を取るもの、又詠人の名から上の句を讀んで下の句の札を取るもの等色々あるが、之れは重に元祿かるたを用いて、女子供などがする方法である。

競技用には標準歌留多を用ゐる。その理由は元祿かるたには、癖

があつて、その札に慣れたものには宜いが、その札に慣れない人には甚だしく不便を感じるの恨みがあるからである、標準歌留多は假名許りでその弊が無い。されば諸君は必ず標準歌留多を用ゐなければならぬ。

先づ順序として、競技を行ふには、競技規則を知らなければならぬ。現今に於て最も進歩した、最も合理的な規則は、左に掲ぐる處の東京歌留多會の競技規定である。

五、東京歌留多會競技規定

第一條 競技は二人相對して行ふものとし、各自の持札は二十五枚を定數とす。而して競技に使用する札(標準かるた)は幹事の配付



せるものに限る。

第二條 對技者の指定は抽籤を以て決し、其の指定に對しては異議を申立つるを得ず。

第三條 第一回競技に於て勝ちたる者を第二回の競技者とす。(以下之に倣ふ)。

第四條 連勝せる競技者が入賞豫定人員の殆ど倍數に達したる時は入賞者豫選競技を開始す。併して此の競技の勝者を當日の入賞者とし、更に入賞者競技に移り其の等級を決せしむ。

第五條 入賞者競技を除き其他の競技に於ける負者は爾後の競技に参加する事を得ず。

第六條 前條の詮衡を経て、最後に残りたる全勝者を第一等賞とし、次ぎの成績をの者を第二等賞者とす。(以下之に倣ふ)

第七條 札の配列は膝の前方縦三段横三尺の範圍内とす。

第八條 札を取る手は配列せる札の後方に置くべきものとす。

第九條 早く札の無くなりたる方を勝とす。

第十條 札に早く手の觸れたる者を以て其札を取りたるものとす。

第十一條 札を敗る手は二本の指(中指、人差指)を用ひ、手の甲掌又は數指を以て札を蔽ふ如き取方をなすべからず。

第十二條 取札に對し同時に手を觸れたる場合は其の札の所有者が權利を生ず。



第十三條 札を取るに際し、目的の札を其の附近の多數と共に動かし、其の取否明かならざる時は審判委員は無効を宣告し、遅れながらも確實に目的の札に手を觸れたる者を以て其の札を取りたる者と判定す。

第十四條 競技者並に審判委員は、競技中常に札の紛失せざる様注意すべし。

而して尙ほ若し紛失したる場合に、其の紛失したる札の讀まれたる時は、善意にして然も對技者より早く其の紛失せる旨を發言せる者に權利を生ず。

第十五條 讀唱は全歌として、如何なる事由ありとも讀返すことなし。

し。

第十六條 競技者は「キマリ字」、其の他一般の札が己に讀まれしや否やを、何人にも問糾する事を得ず。

第十七條 對技者の札を對技者より早く取りたる時は、其の都度自己の持札一枚を對技者に送る者とす。

第十八條 「お手附」とは讀まれたる札が對技者若しくは自己の持札の中になき時誤て對技者若しくは自己の札に手を觸れたるものをいふ。

第十九條 一方の競技者が「お手附」をなしたる札、或は札を押へたる指に、他の一方の競技者が札を取る意志を以て手を觸れたる



場合も亦之れを「お手附」とす。

第二十條 「お手附」をなしたる時は、其の都度對技者より對技者の持札一枚を受取るものとす。

但し送り札は、送る者の任意とす。

第二十一條 讀まれたる札が双方何れにもあらざる時、双方へ「お手附」を爲したる時は送り札は二枚とす。

第二十二條 一廣送りたる札は如何なる事あるも他の札に換ゆる事を得ず。

第二十三條 競技者に端數を生じたる時は、幹事中より抽籤を以て對技者を出す、此の對技者を「消止者」といふ。

第二十四條 競技者は宜しく公明に、靜肅に競技を行ひ假初にも卑怯粗暴の舉動あるべからず、其の争や須らく君子たるべし。  
第二十五條 競技者は審判委員の裁斷に對し絶對に服従すべきものとす。

附 則

本規定に明文なき事項は、幹事の合議に依り之れを決す。

第二 歌の暗誦とキマリ字

一、歌の暗誦方法

かるたの競技方法は、上の句から下の句を讀むのであるから、早



く札を取らうとするには、歌を暗誦する必要がある。歌を知らない  
とすれば、讀手が上の句を讀み終へて下の句を讀むまで待たなければ、  
下の句の札を取る事が出来ぬ。上の句を讀み始めたら、直ぐ札  
を取る爲めには是非共頭を暗誦してゐなければならぬ。

歌の暗誦の順序としては、次の階梯を経なければならぬ。

イ 上の句を見て下の句を思ひ出せる様に練習すること。

これは最も初歩の人でも大抵は知つてゐる事であるが、かるたを  
取る方法の第一歩である。例へば「天の原ふりさけ見れた春日なる」  
といはれたらば、下の句の「三笠の山に出でし月かも」と思ひ出せ  
る練習である。知つてゐるのと知らないとは、幾らも違ひがない様

であるが、實際には、「春日なる」と讀んだ時に取るのと、「三笠の  
山……」と讀まれて始めて取るのとは、早さに於て雲泥の差がある。  
此の練習は、二十回も繰り返して讀めば、自然と句調に依つて覚え  
られるものだ。之れが完全に出來る様になつたらば、次ぎの方法に  
移る。

ロ、下の句を見て上の句を思ひ出せる様に練習すること  
此の練習は少し困難であるが、然しこれが出來なければ、かるた  
は取れない、即ち取り札を見て、上の句が思ひ出せる様になれば、  
上の句を讀まれて始めて始めて氣がつくのと異つて、非常に早く取れる。  
又例へば取り札が少くなつて、五六枚宛になつた時などは、上の句



を知つて居なければ、自分の札も取られる許りでなく、逆も人の札を覗ふといふ事が出来ない、此の練習方法は、取り札の裏面に上の句を書いて置いた練習するのも可いが、紙に百人一首を書いて二つに折り、下の句を見て上の句を讀んで見る、何うしても思ひ出せない時には、紙を擴げて上の句を見る、これを二三日繰り返して、略出来る様になつたら、取り札を手にとつて、一枚宛その札の上の句を讀みながら、百枚の札を調べる、而して上の句が思ひ出せない札は、札の裏なり、書いた紙なりを見て能く覚え込む、暫らくして又此の方法を繰り返して見る、斯くすれば大抵二三日で覚えられる。

ハ、上の句の一部を聞いたたら、或は下の句を見れば反對

的に下の句或は上の句を思ひ出せる様に練習すること  
イ、ロの暗誦が出来た様になつたとして、それだけでは早取法に於て充分でない、今度は猶一步進んで、上の句の一部例へば「秋の田……」と讀むのを聞いたならば、直ぐに下の句の「我が衣手は露に濡れつゝ」が思ひ出せる様にならなければならぬ、又取り札を見て、上の句が反對的に思ひ出せなければならぬ、例へば「かこち顔なる我が涙かな」の札を見て、上の句は「なげきつゝひとりねる夜の……」であつたかと思ひ、否!!「嘆けとて月夜は物を……」であつたと思ひ出す様では仕方が無い、取り札を見て居るのは、恰も上の句を見てゐるのと同じである迄に練習しなければならぬ、要す



るにイ、ロの方法を能く練習して、札に親炙する迄記憶する、斯くして自然に、ハの方法が會得されるのであるが、之れを會得する迄には、却々容易の業でない。イの方法は、雜作なく覺えられるが、ロの方法は、多少困難であつて、之れを繰返して練習し、下の句を見て、問へずにくらゝと、上の句が口から出る様になつて、始めて此のハの方法を會得する事が出来るのである。

以上の三法が出来れば、一通り札を拾ふ事が出来る、即ち素人の仲間に入れるのである。今その便法の爲めに、百人一首を上上の句の一字に依つて列挙しやう。

あ の 部

(十六枚)

秋の田のかり穂の庵の苔をあらみ  
秋風にたなびく雲の絶間より  
あはれともいふべき人は思ほへて  
淡路島通ふ千鳥の啼く聲に  
あらざらん此の世の外に思ひ出に  
嵐ふく三室の山の紅葉葉は  
天の原ふりさけ見れば春日なる  
天津風雲の通ひ路ふきとちよ  
有明のつれなく見えし別れより

我衣手は露に濡れつゝ  
もれ出づる日の影のさやけさ  
身の徒らになりぬべきかな  
幾夜寝ざめぬ須磨の關守  
今一度の逢ふ事もがな  
龍田の川の錦なりけり  
三笠の山に出でし月かも  
少女の妻しばしといめん  
曉ばかり憂きものはなし



方取の多留歌

有馬山いなさ、原風ふけば  
あさぼらけ有明の月と見るまでに  
あさぼらけ宇治の川霧絶々に  
あさぢふの小野の篠原忍ぶれど  
足曳の山鳥の尾のしだり尾の  
あひ見ての後の心にくらぶれば  
あけぬれば暮るゝ物とは知り乍ら

な の 部

夏の夜はまだ宵乍ら明けぬるを  
長らへばまだ此の頃や忍ばれん

(八枚)

いでそよ人を忘れやはする  
吉野の里に降れる白雪  
あらはれ渡る瀬々の綱代木  
餘りてなどか人の戀しき  
長々し夜を獨りかもねん  
昔は物を思はざりけり  
猶うらめしき朝ぼらけかな

雲のいづこに月宿らん  
憂しと見し世ぞ今は戀しき

方取の多留歌

長からむ心も知らず黒髪の  
嘆けさて月夜は物を思はする  
嘆きつゝ獨りぬる夜の明くる間は  
なにしあはさ逢坂山のされかづら  
難波瀉短かきあしのふしの間も  
難波江のあしの假寝の一夜ゆへ

ワ の 部

わびぬれば今はた同じ難波なる  
わが庵は都のたつみ鹿ぞすむ  
我が袖は沙干に見えぬ沖の石の

(七枚)

亂れて今朝は物をこそ思へ  
かこち顔なる我が涙かな  
いかに久しき物とかはしる  
人に知られて来る由もがな  
逢はで此の世を過してよとや  
身をつくしてや戀ひ渡るべき

身をつくしても逢はんとぞ思ふ  
世を宇治山と人はいふなり  
人こそ知らねかはくまもなし



方取の多留歌

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし  
忘れじの行末までの難ければ  
和田の原漕出で見れば各方の  
和田の原八十島かけて漕出ぬと

オの部

(七枚)

人の命の惜くもあるかな  
今日を限りの命ともがな  
雪井にまがう沖つ白波  
人には告げよあまのつり船

逢ふ事の絶えてしなくば仲々に

大江山幾野の道の遠ければ

おほけなく憂世の民におほふかな

奥山に紅葉ふみわけ啼く鹿の

小倉山峯の紅葉葉心あらは

人も身をも恨みざらまし

まだ文も見ず天の橋立

我が立袖に墨染の袖

聲きく時ぞ秋は悲しき

今一度の御幸またなむ

方取の多留歌

音に聞きたかしが濱の仇波は  
思ひ侘びさても命はあるものを

タの部

(六枚)

かけじや袖の濡れもこそすれ  
憂きに絶えぬは涙なりけり

高砂の尾上の櫻咲きにけり

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど

田子の浦に打出で見れば白砂の

立別れいなげの山の峯におふる

玉の緒よたえれば絶えぬ長らへば

誰をか知る人にせん高砂の

コの部

(六枚)

外山の霞たゝずもあらなむ  
名こる流れて猶聞えけれ  
富士の高根に雪は降りつゝ  
松とし聞かば今歸りこむ  
忍ぶる事よばりもぞする  
松も昔の友ならなくに



方取の多留歌

此の度はぬさも取りあへず手向山  
来ぬ人を待つほの浦の夕なぎに  
これやこの行くも歸るも別れては  
戀すてふ我が名はまだき立ちにけり  
心にもあらで憂世に長らへば  
心あてに居らばや居らん初霜の

紅葉の錦神のまにまに  
焼くやもしなの身もこがれつゝ  
知るも知らぬも逢坂の關  
人知れずこそ思ひそめしが  
戀しかるべき夜半の月かな  
なきまごはせる白菊の花

ミの部

(五枚)

御垣守衛士のたく火の夜はもえて  
みかの原湧きて流るゝ泉川  
みちのくの忍ぶ文字摺り誰故に

書は消えつゝ物をこそ思へ  
いつみきとてか戀しかるらむ  
亂れそめにし我ならなくに

方取の多留歌

見せばやな小島の蛋の袖だにも  
三吉野の山の秋風小夜更けて  
風そよぐ奈良の小川の夕暮は  
風をいたみ岩うつ波のおのれのみ  
かくとだにえやは伊吹のさしも草  
鶺鴒の渡せる橋に置く霜の

濡れにぞ濡れじ色は變らじ  
故郷寒く衣うつなり  
御祓ぞ夏のしるしなりけり  
碎けて物を思ふ頃かな  
さしも知らじな燃ゆる思ひを  
白きを見れば夜ぞ更けにける

カの部

(四枚)

ヤの部

(四枚)

やすらばで寝なまし物を小夜更けて  
人重葎茂れる宿の淋しさに

傾くまでの月を見しかな  
人こそ見えれ秋は來にけり



方取の多留歌

山里は冬ぞ淋しさまさりける  
山川に風のかけたるしがらみは

ハ●の●部

(四枚)

人めも草もかれぬと思へば  
流れもあへぬ紅葉なりけり

春の夜の夢ばかりなる手枕に  
春過ぎて夏來にけらし白砂の  
花の色は移りにけりな徒らに  
花さそふ嵐の庭の雪ならで

ヨ●の●部

(四枚)

かひなく立たん名こそ惜しけれ  
衣ほすてふ天のかく山  
我がみ世にふる眺めせしまに  
降りゆくものは我が身なりけり

夜もすがら物思ふ頃は明けやらで  
夜をこめて鳥の空音ははかるとも

ねやの隙さへ情なかりけり  
世に逢坂の関はゆるさじ

イ●の●部

(三枚)

世の中は常にもかにも落こぐ  
世の中よ道こそなけれ思ひ入る

あまの小舟を綱でかなしむ  
山の奥にも鹿ぞ啼くなる

古の奈良の都の八重櫻

今日九重に匂ひぬるかな

今はたゞ思ひ絶えなむとばかりを

人惚手ならでいふ由もがな

今こむといひしばかりに長月の

有明の月を待ち出づるかな

キ●の●部

(三枚)

君が爲め惜しからざりし命さへ  
君が爲め春の野に出でて若菜つむ  
きりぎりす鳴くや霜夜のさむしみに

長くもがなと思ひけるかな  
我が衣手に雪は降りつゝ  
衣かたしく獨りかもねん

方取の多留歌



方取の多留歌

チ●の●部

千早ちはやふる神代かみよもきかず立田川たつたがは  
契ちぎりきなかたみに袖そでを絞しぼりつゝ  
契ちぎりおきしませもが露つゆを命いのちにて

(三)枚さんまい

からくれないに水みづくゝるとは  
末すゑの松山波まつやまなみこさじとは  
あはれ今年ことしの秋あきもいぬめり

ヒ●の●部

人ひともなし人も恨うらめしあぢきなく  
人ひとはいざ心こころも知らずふさは  
久方ひさかたの光ひかりのどけき春はるの日に

(三)枚さんまい

世よを思おもふ故ゆゑに物思ものおもふ身みは  
花はなぞ昔むかしの香かに匂におひける  
しづ心こころなく花はなのちるらむ

ウ●の●部

恨うらみわびさても命いのちはあるものを

(二)枚にまい

戀こひに朽くちなむ名なこそ惜おぼしけれ

ツ●の●部

うかりける人ひとを初瀬はつせの山やまおろし  
つくば根ねの峯みねより落おつるみながの川がは  
月見つきみれば千々ちぢぢに物ものこそ悲かなしけれ

(二)枚にまい

はげしかれとはいのらぬものを  
戀こひぞ積つもりて淵ふちとなりぬる  
我わが身み一つの秋あきにはあらねど

シ●の●部

忍しのぶれど色いろに出でにけり我戀わがこひは  
白露しらつゆた風かぜの吹ふきしく秋あきの野のは

(二)枚にまい

物ものや思おもふと人ひとのとふまで  
つらぬきとめぬ玉たまぞ散ちりける

ユ●の●部

夕ゆざれば門田かたの稻葉いなば訪おとれて

(二)枚にまい

あしのまる屋やに秋風あきかぜぞ吹ふく

方取の多留歌



方取の多留歌

由良の戸を渡る舟人揖をたへ

モ ● の ● 部 ●

行衛も知らぬ戀の道かな

(二枚)

諸共にあはれと思へ山櫻

百敷や古き軒端の忍ぶにも

花より外に知る人もなし  
猶餘りある昔なりけり

フ ● の ● 部 ●

(一枚)

吹くからに秋の草木のしほるれば

サ ● の ● 部 ●

(一枚)

むべ山風をあらしといふらん

淋しさに宿を立出で、眺むれば

ホ ● の ● 部 ●

(一枚)

何處も同じ秋の夕暮

塙鳥鳴きつるかたを眺むれば

セ ● の ● 部 ●

(一枚)

たい明有の月ぞ残れる

瀬を早み岩にせかる、瀧川の

ム ● の ● 部 ●

(一枚)

われても末に逢はんとぞ思ふ

村雨の露もまたひね檜の葉に

ス ● の ● 部 ●

(一枚)

霧立ちののぼる秋の夕暮

住の江の岸による波よるさへや

メ ● の ● 部 ●

(一枚)

夢の通ひ路人目よくらむ

めぐり逢ひて見しや夫とも分かぬまに

雲かくれにし夜半の月かな

方取の多留歌



## 二 キマリ字

吾々は歌の暗誦が出来た、これが爲めに可成りに迄、札を早く取る事が出来る様になつた、更に猶早く取れる方法は何であるかといふに、キマリ字の研究である、素人の中にはキマリ字の事が明かでない者が多い、

百人一首の歌の内、讀手が上の句の一音を讀んで取れる札がある、例へば「フ」といふ最初の音は、「吹くからに秋の草木のしほればむべ山風を嵐といふらん」の歌より外にないから、「フ」といふ最初の音を聞いた丈で、「むべ山風を……」の札を取る事が出来

る、此の場合に於て「フ」はキマリ字だといふ、今度は讀手が上の句の最初の一音を「ア」と讀むとする、處が前節にある如くアの札は十六枚あるから未だ何の札を取つて可いのか分らない、次ぎに来る第二音が「マ」だとすれば十六枚の中範圍は狭められて、「天の原……三笠の山に」と天津風……乙女のすがた」との二枚となる、がまだ何れを取つて可いか分らない、第三音の「ノ」を聞いて始めて「三笠の山に」を取り、「ツ」を聞いて、「乙女のすがた」を取る事が出来る、即ち「三笠の山に」のキマリ字はノであり、「乙女のすがた」のキマリ字は、ツである。

「むべ山風を」の如く、キマリ字は上の句の最初の一音である場合



には、此の札の事を一字札と云ひ、「三笠の山に」乙女のすがた」の如き札は、キマリ字が第三音であるから三字札といふ、之れに倣ふて四字札、五字札、六字札をいふ、キマリ字の最も長いのは六字札である。

一字札や二字札は、讀手が讀み上げるや否や直ぐ取れるが、四字札や五字札六字札となると非常に取り難い、最も注意を要する札である、此の四字札五字札六字札を普通山札といつてゐる、例へば「人」には告げよ天のつり船、「雲井にまがふ沖つ白波」等の如きである。之れと同時に「三笠の山に」の札に對して「乙女のすがた」は友札であるといふ、「花ぞ昔の」と「世を思ふゆるに」の如き、「戀ぞ積り

て」と「我が身ひとつの」の如き、或は「白きを見れば」と「さしも知らじな」の如き皆之れを相對的に友札なりと稱する。されば最も早く札を取らんとするには、此のキマリ字を暗記しなければならぬ、此のキマリ字を知らないで、札を早く取らうとすれば、勢ひ御手附を免れない、キマリ字を能く覚えて居れば、御手附等の如き事は無い筈である。

次に一字札から六字札迄順を追うて撃げて見やう。

一字札 七枚

- フくからに秋の草木の……………むべ山風を嵐と……………
- サびしさに宿を立出で……………何處もおなじ秋の……………



ホとゝぎす啼きつる方を……唯有明の月ぞ……  
 セを早み岩にせかるゝ……われても末に逢はんぞぞ……  
 ムらさめの露もまだひぬ……霧立ちのぼる秋の……  
 スみの江の岸に寄る波……夢の通ひ路人目……  
 メぐり逢ひて見しや夫とも……雲かくれにし夜半の……

二字札 四十二枚

あし曳の山鳥の尾の……長々し夜を獨り……  
 あけぬれば暮るゝ物とは……猶うらめしき朝……  
 あひ見ての後の心に……昔は物を思は……  
 いにしへの奈良の都の……今日九重に……

ちはやふる神代もさかす……から紅に水……  
 をぐら山峰の紅葉葉……今一度の御幸……  
 おく山に紅葉ふみわけ……聲きく時ぞ秋は……  
 おとにきくたをしの濱の……かけじや袖の……  
 おもひ侘びさても命は……うきに絶えぬは……  
 わびぬれば今はた同じ……身をつくしても……  
 かくどだにえやは伊吹の……さしも知らじな……  
 かさゝぎの渡せる橋に……白きを見れば……  
 たれをかも知る人にせん……松も昔の友なら……  
 たごの浦に打出で、見れば……富士の高根に雪は……



たかさごの尾上の櫻……外山のかすみ……  
 たきの音は絶えて久しく……名こそ流れて……  
 たまの緒よ絶えなば……忍ぶる事のよはり……  
 たち別れいな葉の山の……待つとし聞かば……  
 つき見れば千々に物こそ……我が身一つの……  
 つくばねの峰より落つる……戀ぞ積りてふちと……  
 ゆらの戸を渡る舟人……行衛も知らぬ……  
 ゆうざれば門田の稻葉……あしのまる屋に……  
 よをこめて鳥の空音を……世に逢ふ坂の……  
 よもすがら物思ふ頃は……ねやのひまさへ……

やへむぐら茂れの宿の……人こそ見えね……  
 やすらはでねなまし物を……かたぶく迄の月を……  
 きりぎりす啼くや霜夜の……衣かたしき獨り……  
 こひすてふ我名はまだき……人しれすこそ……  
 こぬ人をまつほの浦の……熾くや藻鹽の……  
 この度はぬさもとりあはず……紅葉の錦神の……  
 これやこの行くも歸るも……知るも知らぬも……  
 しのぶれど色に出でけり……物や思ふと人の……  
 しら露に風のふさしく……つらぬきとめぬ……  
 うらみわびさても命の……戀に朽ちなむ……



うかりける人を初瀬の……はげしかれとは……  
 も、ひきや古き軒端の……猶あまりある……  
 もろ共にあはれと思へ……花より外に知る……  
 みせばなや小島の蛋の……濡れにぞぬれし……  
 みちのくの忍ぶ文字摺り……亂れそめにし……  
 みよしの、山の秋風……故郷さむく衣……  
 ひさかたの光のどけき……しづ心なく花の……  
 なつの夜はまだ宵乍ら……雲のいづこに月……

三字札 三十七枚

いまこむと云ひし許りに……有明の月を待ち……

いまはたゞ思ひ絶えなんと……人傳手ならで……  
 はるの夜の夢はかりなる……かひなくたゝむ……  
 はるすぎて夏來にけらし……衣ほすてふ天の……  
 おふことの絶えてし……人をも身をも……  
 おうけなく憂き世の民に……我が立杣に墨……  
 おうえ山幾野の道の……まだ文も見ず……  
 わすれじの行末までも……今日を限りの……  
 わすらるゝ身をば思はず……人の命の惜しくも……  
 わがいほは都のたつみ……世を宇治山と……  
 わがそでは汐干に見えね……人こそ知らね……



かせをいたみ岩打つ波の……碎けて物を思ふ……  
 かせそよぐ奈良の小川の……御祓ぞ夏のしるし……  
 はなの色は移りにけりな……我が身世にふる……  
 はなさそふ嵐の庭の雪……降りゆくものは……  
 やまざとは冬ぞ淋しさ……人目も草もかれぬ……  
 やまかはに風のかけたる……流れもあへぬ涙……  
 なげけさては月夜はものを……かこち願なる我が……  
 なげきつゝ、獨りぬる夜の……いかに久しき物と……  
 ながからむ心もしらず……亂れて今朝は物を……  
 なにしおは逢坂山の……人に知られで来る……

ひどはいざ心し知らず……花ぞ昔の香に匂ひ……  
 ひともおし人も恨めし……世を思ふゆるに……  
 みかき守衛士の焚く火の……ひるは消えつゝ……  
 みかの原わきてながるゝ……いづみきとてか……

四字札 六枚

ちぎりきなかたみに袖を……末の松山波こさじ……  
 ちぎりおきしさせもが……あはれ今年の秋も……  
 こゝろあてに居らばや……おきまどはせる……  
 こゝろにもあらで浮世に……戀しかるべき夜半……  
 なにはがた短かきあしの……逢はで此の世を……



なには江のあしの假寝の……身をつくしてや……

五字札 二枚

よのなかは常にもかに……海土の小舟をつな……

よのなかよ道こそなけれ……山の奥にも鹿ぞ……

六字札 六枚

わだのはらやそ島かけて……人には告げよ天の……

わだのはらこぎ出で……雲井にまがふ沖つ……

あさばらけう治の川ぎり……あらはれ渡る瀬々の……

あさばらけあり明の月と……吉野の里にふれる……

きみがためはるの野に……我が衣手に雪は降り……

きみがためをしからざり 長くもがなと思ひ……

右の内、一字札は誰れでも最初に覚える札であるが、之れを覚

えるには、「娘房はせ」と覚え込むのが可い、其の他の札は、山札と

友札とに分けて覚える。

### 第三 札の配列法

競技をなすに方り、歌の暗誦、キマリ字の記憶に次いで必要なる

は、持札の配列法である、讀手が上の句を讀む、そのキマリ字も分

り、下の句が分つたとして、扱て札は何處にあるやを捜さなければ

ならぬ、夫れ故札を並べる時に、何の札は何處、此の札は何處とい



ふ風に一定した配列法を用ひなければならぬ、一定した方法に依つて並べて置く時は、札が讀まれる場合に、自然とその方へ手が出る。若しも無難作に並べて、之れを覚え難いばかりでなく、競技の度毎にその困難を繰り返すのであるから、一通りの骨折りでない、殊に配列して、短時間の中に、確實に完全に記憶しなければならぬのであるから、自己には自己の常に一定した配列の方法を用ひる必要がある。

一、下の句に依る配列法

此の方法は、下の句の頭字に依つて列べる方法であるが、列べ易いといふ理由から、練習し始める人には能く用ゐられる、競技の際

には、上の句で列べた様に早く取れない憾みがある、加之競技中に於て、上の句に依る配列法よりも割合に頭腦を使ふから、初心者に取つては、何方かといへば、利益ある方法では無い、然し熟達した人にとつては、相手が取り難い、即ち視ひ難いといふ點から、盛んに用ゐられる、現今歌留多會の撰手の中でも用ゐてゐる、人が多い、競技に當りては、三段に列べるのであるから、便宜上百枚の札を畧三等分して、下の句の頭字をいろは順に依つて分類して見ると次ぎの様になる。

- |     |       |       |       |       |       |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 第一段 | い(七枚) | は(三枚) | を(二枚) | わ(六枚) | か(五枚) |
|     | よ(四枚) | た(二枚) | な(六枚) | き(一枚) | つ(一枚) |



- ね(一枚) 三十八枚
- 第二段 お(三枚) く(四枚) や(二枚) ま(三枚) け(二枚)
- ふ(三枚) こ(六枚) あ(八枚) 三十一枚
- 第三段 ゆ(二枚) み(七枚) し(四枚) ひ(十枚) も(三枚)
- さ(一枚) と(一枚) め(一枚) す(一枚) む(一枚)
- 三十一枚

二、上の句に依る配列法

此の方法は、上の句の頭字に依つて列べる方法であるが、初心者  
 が列べるには、多少最初には困難である。が之れを覚え込む時は、  
 札を取るのに非常に早く取れる代りに、同じ上の句の頭字が多い場

- 合には、御手附をする慣れがある、それと同時に、山札や友札が同  
 じ場所列んである爲めに、對手から覗はれ易い、然し自己に取つ  
 ては、競技中頭腦を使ふ事が尠いといふ利益がある、次に此の方法  
 に従うてあかさたなの順に三段に列べて見る。
- 第一段 あ(六枚) か(四枚) た(六枚) な八(枚) は(四枚)
  - 三十八枚
  - 第二段 や(四枚) わ(七枚) い(三枚) き(三枚) (し二枚)
  - ち(三枚) ひ(三枚) み(五枚) 三十枚
  - 第三段 う(二枚) つ(二枚) ゆ(二枚) お(七枚) こ(六枚)
  - も(二枚) よ(匹枚) 一字札七枚三十二枚



三、キマリ字に依る配列法

此の方法は、キマリ字に依つて、夫れをイロハ順或はアカサタナ順に従うて配列する方法である、初心者には配列するのに非常な困難で、又取り難い、その代りに、一度此の方法に慣れる時には、確實に取れる許りでなく、御手附の憂ひが毫も無いといふ特徴がある、先づ分類して見ると。

- ノ(七枚) ハ、キ、ラ(各五枚) サ、モ、レ、カ、
- オ(各四枚) シ、ス、ク、エ、ケ、コ、ア(各三枚)
- イ、ニ、ザ、ガ、マ、セ、チ、ヂ、ツ、ヒ、フ、ヨ、
- (各二枚) ウ、ゴ、ト、ヌ、ホ、ム、メ、ヤ、リ、

ロ、グ(各一枚)

四、上の句の二字目に依る紀列法

上の句の頭から二字目に依つて分類して、配列する方法である、例へば「天の原ふりさけ見れば……三笠の山に出でし……」と「今來むと云ひし許りに……有明の月を待ち……」とは二字目が同じであるから一所に列べるといふが如き方法である、此の方法も前者と同じく、列べるのに非常に手数を要するが、キマリ字の所謂二字札は、四十二枚といふ殆んど全札の半数を占めて居るから、第一の上の句に依る配列法と、そのキマリ字に依る配列法との利點のみを兼有せるが如き特徴がある、猶且つ讀手の聲は第一音よりも第二音の方が



我々の耳朶に強く響く、又競技會の如き、多數の競技に讀手が一人である時は、能く第一音を聞き漏らす場合が多いが、斯かる際には此の方法に依る配列法は最も策の宜しきを得たるものだといふ事が出来る、萬朝社の黒岩氏の如きは、かつて此の方法が最も可なるものとして大に懲誦された。

- マ(七枚) ラ(六枚) オ、サ、(各五枚) キ、ク、カ
- ト、ニ、ノ、ガ(各四枚) ミ、モ、ス、リ(各三枚)
- グ、ゲ、ギ、コ、ゼ、ダ、ビ、ナ、ル、レ、ネ(各二枚)
- イ、ケ、ゴ、ザ、シ、セ、チ、ツ、ヌ、ハ、ヒ
- フ、ヘ、ロ、ヨ(各一枚)

五、其の他の配列法  
イ、詠人に依る配列法  
此の方法も最初は、配列するのに困難なる方法であるが、慣れる場合には同じであるから、能く用ゐられる人に依つて分類の方法が違ふけれど、其の一つを示す時は、

- 第一天 大臣(七枚) 僧侶(十三枚) 藤原(三枚) 太夫(四枚)
- 清原(二枚) 源(二枚) 紀(二枚) 三十三枚
- 第二段 天皇(三枚) 院(五枚) 親王(二枚) 朝臣(八枚) 公(二枚) 文屋(二枚) 壬生(二枚) 納言(十枚) 三十枚



第三段 女院(四枚) 母(二枚) 式部(二枚) 伊勢(二枚) 内侍(二枚) 雑女(七枚) 参議(三枚) 其他雑(十一枚) 三十三枚

ロ、歌の意味に依る配列法

之れに依つて分類して見ると略次の如くなる。

戀(四十四枚) 秋(十五枚) 春、冬(各六枚) 夏、旅

路(各四枚) 雑(二十一枚) 或は猶委しく、月、雪、花

山、人といふ様に分類しても宜しい。

ハ、百人一首の順に依る配列法

天智天皇の「我が衣手は露にぬれつゝ」から順に、紀友則の「しづ

心なく花の散るかん」迄を第一段に、紀貫之の「花ぞ昔の香に匂ひける」から、周防内侍の「かひなく立たん名こそ惜しけれ」迄を第二段、以下を第三段に列べる、此の方法も、少し稽古すれば覺えるには、左程困難でない。

ニ、其他

以上を挙げた外に、上の句をローマ綴りにして、ABCの順に列べる方法がある、又歌の所属せる歌集に依つて分類する方法もある例へば古今集の二十四枚、新古今集の十三枚、千載集の十四枚等といふ様に分類する、其他にも色々あるが、要するに以上列挙した方法を應用したものに過ぎない。



## 六、最も宜き配列法

初心者しよしんしゃは、札ふだの配列方法はいれつほうほうに非常ひじやうに苦心くしんする様やうである、何どういふ列ならべ方かたが一番ばん可いいですか？」といふ質問しつもんを、私わたくしは幾度いくどもなく聞きかされ、斯かういふ時ときに、私わたくしは何時いつも、「貴君あなたの常つねに遣やつてゐる方法ほうほうが最も宜よろしい」と答こたへる、實際じつさいは、何麼なんな配列方法はいれつほうほうでも自分じぶんの常つねに慣用くわんようしてゐる方法ほうほうが、可よし多少たせうの缺點けつてんはあるにしても、上かみの句くを聞きいて直すぐ、一種しゆの反射運動はんしゃうどうの様やうに札ふだのある方面ほうめんに手てが出でるものである、之これが今私いまわたくしが述べた利害得失りがいとくしつを參酌さんしやくして、工夫くふうされたならば、夫それが最も堅固けんこなる、金城鐵壁きんじやうてつぺきである。

最初さいしよに、今いまから練習れんしゆを初はじめる初心者しよしんしゃに向むかつては、上かみの句くに依よる配列はいれつ

法ほうを私わたくしは勸すすめる、此この方法ほうほうは、歌うたの暗誦あんしやうの練習れんしゆになり、次ついでではキマリ字じを覺おぼえるのに非常ひじやうに都合つがふが可いい、即すなはち上かみの句くに従したがうて列ならべ、頭かしらより何字目なんじめにキマリ字じがあるかといふ事は、試合しあひの回数くわいすうを重ねかきる毎ごとに、自然しぜんに覺おぼえられる利點りてんがあるからである、而そして此この方法ほうほうは、上かみの句くの第一音だいいんに依よつて聞きき分わけるのであるから、手ての出足であしといへば滑稽こっけいだが、スターチング、モーションが早はやい、その代かはり前節ぜんせつに述べにた様やうに御手附おてつけの憂うれひも亦尠またせんせうでないといふ事を記憶きおくしなければならぬ、猶なほその上うへに、敵手てきしゆから視ねらはれ易やすいといふ缺點けつてんもある、御手附おてつけには周密しうみつなる注意ちういを拂はらふとして、敵てきから視ねらはれ易やすいといふ缺點けつてんは他の何れの方法ほうほうよりも、最も憂うれふべきである、然しかし初心者しよしんしゃに取とつて



此の方法は、歌の暗誦、キマリ字の稽古、モーシヨンの練習、御手附の矯正など色々の點に於て、最も宜き教材を提供して居る。

下の句依る配列法は、稍進歩せる人々が現今用ゐてゐる、勿論全くの初心者も又用ゐるが、それは問題外である、最初には非常に取り悪いが、黒人になれば、下の句の札は、恰度上の句を見てゐる様なものであるから、毫も差支がない、けれど取札を未だ多く持つてゐる際には、上の句から下の句を聯想するといふ、心的プロセスの根本義から見て、何うしても遅れる譯である、受札が十五枚以下なれば、斯ういふ懼れはない、又上の句に依る方法の如く、敵から覗はれる憂ひが尠い、下の句で列べられる時には、自分が常に上の

句で列べて居る人であれば、非常に敵の札が取り難い許りでなく、モーシヨンが遅くなる。

第四の上の句の頭から二字目で配列する方法は、二字札が多いといふ點と、二字目の音が能く聞き取り易いといふ極めて微細なる研究から起つた方法である。

第三のキマリ字に依る配列法も、キマリ字の二字札で多いから、第三の方法と大同小異であるといつて可い、第三、第四の兩法は、先づ缺點から論じて見るに、前者に於ては、一枚の札が、ウゴトヌホムメヤリログの十一枚あり、後者の第四に於ては、イケゴザシセチツヌハヒフヘロヨの十五枚ある、之れは此の配列法の一字札とも



いふべきものである。之れに加ふるに、キマリ字の一字札なるフサホセムスメの七枚あるに至つては、其の煩鎖と混同の面倒なる注意に我々は堪え難い、次ぎに兩法共清音と濁音とを區別して配列しなければならぬ、例へばカの札とガの札、コノ札とゴの札の如きは配列に困難なる許りでなく、常に讀手の聲を聞き分けるといふ、刹那々々に於ける、觀念の注意を要する、此れが清音のみを聞き分くるのであれば、左程の困難では無い、又「むべ山風」霧立ちのぼる」等の札は、一字で取らうとすれば、常に頭の中に、一音と二音との葛藤を生じてゐる、一方を譲つて此の一字札七枚を棄てるとしても、たゞ第二音なり、キマリ字なり丈けを聞けば宜しいといふ事は出来

ぬ、何うしても第一音、或は二三音を聞いて判断しなければならぬ、次ぎに此の兩法の利點は如何といふに、御手附の憂ひが尠いといふ點と、敵から視はれ難いといふ二點に歸する、此の二點は、到底第一、第二の方法の及ぶ處でない。

然らば、最も宜き配列法は何であらうか、いふ迄もなく、前四者の長所のみを綜合した方法である、敵から視ひ難い、而して自分も左程頭を勞さない方法が可い、試みに其の一法をいへば、上の句の第一音に依る配列法を取る、敵の攻撃を防ぐ爲めに、山札、友札等は左右に分けて置く、之れが爲めには注意力を勞する憂ひがあるから、送り札の際にどしどし敵に送る心掛をする、山札が何組もある



時には、注意し切れないから、一組位は並べて置くのも面白い、又  
 覗はれ易い一字札の如きは、第三段の端に列べて、攻撃を防ぐ、先  
 づ斯くして、上の句に依る配列法だといふ事を氣附かせない様にす  
 る、之れは單に讀者へ注意の爲めの一法に過ぎないから、讀者は色  
 々工夫し、考究して適當なる方法を取られん事を望む。

又敵の注意力を殺ぐ爲めに、左右に二分して、中央を空けた配列  
 法が、數年前の撰手の間に流行した事があるが、之れは敵の注意力  
 を殺ぐ許りでなく、敵の目を取る際に、自己の札に觸れる憂ひがな  
 いと云ふ得點がある、普通敵の覗ひ易い場所は、中央の第一段であ  
 るから、其處へは自己の得意の札を置いた方が可い。

## 第四 札の取り方

### 一、札の取り方の種類

札が何人に依つて取られたかを定める場合に、明かなる時には困  
 難は無いが、殆んど同時の場合には、之れを確定するのは非常に困  
 難である、兩者の争も常に此處に生ずる、東京歌留多會では「札  
 に早く手の觸れたるものを以て、其の札を取りたるものとす」と規  
 定された、其の結果として、單に札の上を指したりする如きものは  
 悉く無効となつた、何うしても明瞭なる取り方をしなければなら  
 ぬ、現今用ゐられてゐる方法は、次ぎの五種類に限られてゐる。



一、札を飛ばすこと

二、札を曳くこと

三、札を指先で突くこと

四、札を指先で叩くこと

五、札を指先で押へること

之等の取り方は、札の位置に依つて異り、又攻勢に出るときと、守勢になつた時とに依つて、取り方を變へなければならぬ。

二、敵の札の取り方

競技の最初に於いて、札の多い時には、札を飛ばす法は、餘り綺麗でないから、出来るものなら指先にて突くか、押へるか、叩くか

にし座い。けれど左右の兩端とか、第三段にある札等は、飛ばす方が可い、之れは比較的に札を崩さずに取れるからである、一般には

イ、左側(自己に對して)の部にある札は、左側へ飛ばすか或は突く。

ロ、中央の部にある札は、前方へ突くか、押へるか、或は左側へ刎ね飛ばす。

ハ、右側の部にある札は、右側へ飛ばすか、突くか、押へるか或は叩く。

猶此の外に、敵の札を取る場合は、常に深く手を入れること、即ち札の下端に指先を觸れる様に心懸けねばならぬ、此れは些細な注



意であるが、最も大切なる事である。

三、自己の札の取り方

此の場合には、前者と違つて、札を曳く法が入つて来る。

イ、右側の部にある札は、上段の札は飛ばし、中段の札は飛ばすか、突くか、叩く、下段の札は横に飛ばすか、曳く。

ロ、中央の部にある札は、上段の札は左右に飛ばすか、突くか、叩くか、押へる、中段の札は、押へるか、突くか叩く、下段の札は曳き取る。

ハ、左側の部にある札は、右側の札と全く反対せる取り方を行ふ。

敵の札を取るには、手を深くせよと注意した様に、自己の札を取るには、指先の觸るゝ所は常に、札の上端を心懸けねばならぬ、此れは競技に際して非常に利益あることで、素人の氣附かざる、札の取り方の秘訣である。

四、山札の取り方

山札の取り方は非常に六か敷くて、又御手附を爲し易いから、餘程練習を積まないと取れない、此の練習が出来てゐない人は、實際の伎倆が殆んど互角の者同志でさへも、山札は一札なし取られる。之れは私などの能く見受ける例である。

山札が三枚共自己の持札の時、例へば、「あらはれ渡る……」と「吉



野の里に……」の札がある時、讀手が「あさばらけ……」と讀むのを聞いたならば、「宇の川ぎり、」或は「有明の月」と讀むのを待たずに、一枚の札を拂つて、その手を翻して他の一枚を取る。その手を翻すのは間髪を入れざる敏速でなければならぬ。之れは所謂「返し手」であつて、之れが完全に出來なければ、撰手たるの資格が無いといつても可い位の重要なものがある。上下段に分れてゐる時は、先づ上の札を取り、手を返して下の札を取る。

敵に山札が二枚ある時には、先づ左側の札を飛ばして、右側の札を返す。上下に分れてゐる時には、若し敵が自己よりも弱いと見たならば、下段の札を取り、手を返して上段の札に及ぶ。然し之れは

敵を甘く見縊つた取り方である。大切を取つてする場合には、上段の札から下段に及ぶ。二枚並べてゐる時は、いふ迄もなく二枚共に飛ばすのである。

山札が、敵と自己とに分れてゐる時は、先づ敵の札の上に手を出し、キマリ字を聞いて、電光石火に手を返して自己の札を取る。此の際、手の出し方は、札より餘り高からずして、深く入れなければならぬ。

## 第五 送り札

### 一、送り札の種類



送り札は、競技上の策戦の武器ともいふべきものであつて、餘程注意しなければならぬ。初心者はただ無意識に札を送るけれど、之れは大に慎まなければならぬ。一枚の送り札の如何に依りて、守勢を攻勢に變じ、又は攻勢を守勢に變ずる等、勝敗の分岐點となる事が出来る。

送り札の種類は、自己の嫌ひな札、遅い札、自己の得意な札、相手の嫌ひな札。相手の早い札、山札、友札一字札、敵が配列に苦む札等である。

二、自己の送り札

競技の最初の中、敵に送るべき札は、自己の嫌ひな札、遅い札、

山札等を送る。之れがない時には、一字札、或は自己の並べ難い札を送る。敵が攻勢に出る人であれば、敵に山札又は友札を送つて揃へさせる。山札や友札が揃つて來ると誰れでも、夫れを犠牲としな

い限りは、その方に注意を引かれるから攻勢が鈍るものである。之れに反して敵が守勢の人であれば、斯ういふ人は、一般に山札、友札の取り分けが上手でないから、自己の方に山札等が分れて居る時は其の儘にして置いて、自己の並べ難い札、嫌ひな札等を送る方が得策である。

競技の中頃になると、札が可成り出てゐるから、キマリ字の決定せる、即ちキマリ札が澤山になる。此の時に、自己の形勢がよくて



敵が守勢にある場合は、自己の得意な札を送つて遣り、益々敵の元氣を殺いで置いて、一氣阿勢に敵を敗るのも宜しい。自己が守勢になる時には、山札、友札等が揃つてあれば夫れを送り、又は並べ難い札等を送る。

競技の終りに近い頃には、此の送り札に依つて勝敗が決するのであるから、甚大なる撰擇の注意を要する。自己の形勢が割合に良い時は、山札や友札は分けて送る。或はキマリ札を送るのも可い。それから敵の送つて來た札を返して遣る。敵の送り札は、その札に依つて形勢を挽回しやうと企て、送つて來る札であるから、夫れを又送り返して遣ると、敵に取つてその札は非常に取り難い札と變化す

るのである。自己が守勢にある場合には、山札や友札はそのまゝにして、自己の取り難い札を送る。勿論山札や友札が二枚並んでゐる時は、夫れを送る。山札が自己の方に分れてゐる場合は、他に覗はれ易いと思ふ札、キマリ札等を送る。之れは山札が分れてゐる爲めに、敵が覗つてゐるとしても必ず取られると限らないし。實際自己も尠くとも一枚は取れるからである。餘り大差の無い時には、山札や友札は分けて送り、自己の遅い札、敵の早い札などを送つて、自己は攻勢を取る。

此の外に敵を見て送るといふ事が肝要である。如何なる札が可いかといふ事は、大體に於ていひ得るけれど、必ず斯ういふ札でなけ



ればならぬとはいへない。對手に依つて臨機應變に送らなければならぬ。初心者は成るべくキマリ札、キマリ札と送るのが可い。對手が山を張つて取る人か、御手附の多い人か、尠い人か、又は山札の取り分けが自己よりも上手か、下手かを見て、その上充分考へて送らなければならぬ。さりごと送り札の際その撰定に迷つて時間を費すのは宜しくない。

三、敵の送り札

敵の送り札に就ては、その札は如何なる意味の札であるかといふ事を知らなければならぬ。一般には、最初の中は、自分の取り難い札を送つて寄越すから、惧れる事はないが、中頃より終りにかけて

は注意しなければならぬ。何う意味で寄越したかを観破して、抜く積りであつたとしたならば、反對にその札を取つて敵の元氣を殺いでやる。又敵は送り札を覗ふ様に見せ掛けて、其の實は他の札を狙ふといふ事がある。敵が送り札を撰定してゐる間は、自己は持札の記憶をして、決して敵の送り札に氣を奪はれてはならぬ。而して送り札は一般に御手附を爲し易いから、能く區別して覚え込む必要がある。敵が得意の札を送つたと思へば、下段に列べて、取られない様に注意し、山札、友札等を送つたらば、直ぐ返してやるが宜い。

第六 覗ひ方及姿勢



一、眼の覗ひ方

競技前に於ては敵の札を暗記する必要があるはいふ迄もない。競技中は、自己の札は能く暗記して置いて、時々見返るに過ぎない程度にして、眼は絶えず敵の札に注がなければならぬ。初心者は全く自己の札のみを見てゐて、敵の札の二三枚しか覗はない。之れでは札は更に取りえない許りでなく、一敗地に塗れる事は明かである。一枚々々に目を通して、その札の記憶は常に新しくして置かなければならぬ。例へ暗記してゐるにしても、記憶は新しい刺撃程、注意を喚起し易いからである。次ぎに自己の覗ふ札は、相手に氣取られない様に、餘り眼を注がずして、心で覗ふ事が必要である。又敵が如

何なる札を覗つてゐるかを知らる爲めに、時々敵の眼が如何なる方面に注がれてゐるかを見て、其の方面を注意する。競技の始めに於いては、先づ第一に一字札から順次六字札迄に及ぼして注意する。之れは一字札は他の六字札等よりも早く取れるしキマリ字が長いから敵も御手附を爲し易いから、先づ第一に一字札、二字札に氣を附けなければならぬ。實際競技に際して、私の経験では自己の持札を記憶し、其の上相手の札を記憶する丈けの時間は充分にある。

競技の終り際には、初めと異つて札が早く取れるものだから、覗ひ方も烈しく、耳と目と心を電氣の様に速かに働かせなければなら



ぬ。自己が勝つてゐる時にも、決して油断してはならぬ。自己が一枚で對手が七枚も八枚もある時は誰れでも安心して、夫れが爲めに勝敗が顛倒する例がよくある。又自己が敗けてゐる場合には、自己の札を六分、對手の札を四分に覗ふ事が必要である。而して最も注意すべきは御手附であるが、終り際に於て殊に然りである。

二、姿 勢

姿勢も亦肝要なる條件である。醜い卑しい姿勢は最も忌むべきもので、常に堂々たる姿勢を取り一絲亂れずに戦はなければならぬ。亂座をかいたり、立膝をしたりするのは、禮を失するのみならず、極めて不體裁である。最も良き姿勢は、膝を一尺程開けて座り、左

手を開いて左膝の斜上の疊に附けて、指先は膝と平行する様に置く。右手は膝の中央に、指先を軽く疊に附け、體は前方に屈んで、頭は自己の札の中央の上にある様にする。餘り屈み過ぎて、持札を蔽ふが如き態度は不可い。總じて右手の指先に力を入れるのは、早く取れる様であるが、寧ろ力を入れずに、自然のまゝにして置く方が可い。

第七 競技上の一般心得

一、配列せる札の記憶

二十五枚の札を配列して、その次ぎには自己の札を記憶しなければ



ばならぬ。持札は見ないでも取れる様に記憶する。即ち眼を閉ぢても自分の札が見える様に覚え、次ぎに相手の札を左りから右へと一枚づゝ記憶し、更に眼を閉ぢて相手の札を、心の中で讀んで見る。記憶が出来たらば、山札或は友札、一字札が、自己と相手に如何様に分れてゐるか、双方にないか等を注意して、若しなければ何處にあるかを能く注意する。又自己の方の頭字にない札が相手にあるか自己の方にある頭字の札が相手にないかと比較して見る。斯うして双方を對照して記憶するのは、非常に記憶し易いのみならず、記憶を確實にするものである。素人の中は此の記憶が出来ないのでなくて、爲ないのである。二三度見て最も宜しいといふ。之れでは早く

取る事は到底不可能である。現今競技會では大抵十五分間の猶豫が許されてある。

## 二、出札の記憶

自己と相手の札を合して五十枚であるから、空讀の時がある、此の時の讀み札をも記憶しなければ、御手附或は札を敵に取られる。山札や友札等は、一枚が出たならば夫れできまるのであるから、何うしても茫然してゐる譯にゆかぬ。常に「出札は、何の札が出たといふ事に注意して、ゐなければならぬ。例へば「天の小舟を」と「山の奥にも」の札が二枚ある時は、世の中はか、世の中よと讀手が讀む迄は取れないが、一枚既に出て居れば、ヨノの二字を聞いて直ぐに



取れる。又既に「ねやのひまさへ」も「世に逢ふ坂の」札が出たとすれば、一枚札と同じくヨの一言を聞いた丈で取れる。此の際出札を記憶してゐなかつたとすれば、到底取れないのである。

三、御手附

御手附は、相手に札を取られたと同様に送り札は一枚であるが、相手に札を取られた時には、一枚取られて、一枚貫ふのであるから札が増加はしない、けれど御手附は札が一枚増加する。故に相手との差は二枚の差となるのであるから、最も注意を要する。東京歌留多會の規定を見ると、次の場合が御手附となる。

イ、出札が相手の札の内にある時自己の札に手を觸れた場合。

ロ、出札が自己の札の中にある時相手の札に手を觸れた場合。

ハ、出札が自己の札の中に無い時自己の札に手を觸れた場合。

ニ、出札が相手の札の中に無い時相手の札に手を觸れた場合。

ホ、出札が双方の札の中に無い時双方に手を觸れた場合。

最後の場合は送り札は二枚である。

相手の出札以外の札、又は自己の出札以外の札に手を觸れるのは御手附とはならない。自己の御手附をし、相手も同時に御手附をした場合には、互に送らない。

四、読み方

読み方は、競技の始めから直ぐ読み出す事はなく、空読みといつ



て、百人一首の中からか、或は別の歌を一首讀む。次ぎに其の歌の下の句を繰り返して、今度は取札の上の句に續けて下の句迄讀むのである。一度讀んだらば、暫らく間を置いて、競技者が札を整理し了へたのを見て、今出た札の下の句を繰り返して次ぎの歌に續ける。下の句から上の句に續く、即ち空讀から上の句に移る際には、殊に注意しなければならぬ。一音一句毎に明瞭に且つ徐々と讀む方が可い。之れはキマリ字を能く聞き分けさせる爲めである。而してキマリ字迄は節を附けずに平らに讀む。空讀からキマリ字迄平らに讀むといふ事は最も必要であつて、上の句の一音丈け高く讀んだり、一字丈け長く引張つたりしてはならぬ。

歌の句を變つた讀み方をする者があるが、甚だ嫌ふべき事である。例へば「天津風」を「てんしんふう」と讀んだり「戀すてふ」を「ラズすてう」と讀んだりする等である。





大正六年十月十五日印刷  
大正六年十月二十日發行

キユーピー叢書  
正價金貳拾五錢

著	登
作	錄
權	

著者兼發行者 東京市本郷區湯島五丁目一番地  
高宮政人

發行所 東京市本郷區湯島五丁目一番地  
フジキ堂

印刷者 東京市下谷區長者町一丁目十四番地  
平島曠

印刷所 東京市下谷區長者町一丁目十四番地  
合資社 平島印刷所

賣捌所

東京市神田區塗師町七番地 京屋書房  
東京市神田區鍛冶町四番地 富文館



1174

—新版— 娛樂の粹 —

■ 一首人かるたの取方 送金二十錢  
料二十五錢

▼ キューピー叢書 ▲

■ トランプ必勝法 送金二十錢  
料二十五錢

▼ 以下續刊 ▲

■ 花合せの秘訣 送金二十錢  
料二十五錢

■ 賣捌所！東京！京屋書房！富文館！其他全国各地書林

東京湯島市本郷一丁目五番五  
振替口座 東京 二八〇一五番  
ジフキ堂



終



TXK

0